

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ③

水 沼 昭 子

夏休みが終り、どの子も園生活の中での、自分の場、遊びを取りもどした九月中旬、いつも走ってくる年少のTが幼稚園の門のところで大泣きしている。近づいて声をかけても泣き声はやまない。付添って来たTの祖母が小声で、Tと母親の「朝の出来事」を伝えてくれる。それによると敬老の日を前後して三週間位かけて子ども達が出す、おじいちゃん、おばあちゃんへの「お便り」が原因らしい。「お便り」は園でのスナップ写真など、先生や子ども達のお手紙、絵、その他折紙など、書いたり、作りたくなった時に順番に先生と作る。そしてポストに入れに行く。子どもの、一人一人の取り組み方を大切にしながら毎年続けて来たものである。Tの母親は仕事を持ち、気ぜわしい朝の、その心持ちの中で、この「お便り」の絵をまだかいていないTを叱った。Tにとっては、「まだ、かかない」であって、「もう、かかない」ではなかったのに叱られて、しかも練習までさせられた。大

泣きしているTの手に、その絵がにぎられている。そして、この練習の絵には「もし、幼稚園で描かない様なら、これを使ってほしい」と云う母親のメッセージが付いていた。この報告を聞きながら、内心Tにすまない事をしたと思う。そして困ったとも思う。なぜなら、この「お便り」をはじめて直ぐに、新しい事に敏感に反応するTから予想通りのことばが返って来たから。「ほく、そんなのしないよ」……Tにとつてやりたくないけれど気になるこの「お便り」と、どう取り組ませようかと考えていた時の出来事だった。少しずつ、切手を貼るのを手伝わせたり、封筒をはこんでもらったりしながら数日過ぎていた矢先の事だった。Tにとって、またこの「お便り」が重く、いやな事として心にひろがった事を感じた。一斉にやるのではない私達の園の活動を充分母親に伝えていなかった事に気づかされた。送り迎えの道で付添いのおばあちゃんは心配だったに違いない。「お便り」の話題がで

て、Tがまだやっていない事が気になったに違いない。その  
気持で母親に伝え、Tの大泣きの「出来事」となったのである。  
母親は新しい事になかなか取り組まないTの、いつももの  
くせをしようとしたらう。それがどうしてなのかよりも、皆と  
一緒にしないことが気になっていたと思う。Tへの配慮だけ  
を考え、家庭への連絡、配慮をしなさいでいたことを気づかさ  
れた。

あいかわらずTは園庭に入らず泣いた。祖母には帰っても  
らう。心配して迎えに出て来た担任のT先生やクラスメイト  
がまわりをかこむ。泣きやまぬTをしばくして散歩にさせ  
る。緊張している思いから遠ざけてやりたいと考えて担任に  
許可を取り、Tと私の朝の散歩がはじまった。「T君、いつて  
らっしゃい！ 先生まっているネ」先生の声を背にして泣き  
ながら、でも何かほっとした様な気持がTから伝わってくる。  
手をつないで、だまって歩く。道々、くずの花が咲いてい  
たり、たんぼぼがまだがんばって花をつけているのを知らせ  
てもTは、だまって歩く。けれど少しずつTの気持がおちつ  
いて行くのを感じる。つないでいる手が強くにぎられていた  
のに、だんだん、やわらかく自然に手をつなぐ。

「ずいぶん、大きな声で泣けるんだね、先生びっくりしち  
ゃった」と何気なく話をする。Tがはずかしそうに笑う。ま  
たしばらく歩く。「T先生もおともだちも、みんな待ってる  
よ、そろそろ帰ろうか——」。Tがうなずく。帰り道、くずの  
花をつんで、くずの葉でつつんだ花束をつくる。みんなへの  
おみやげ。Tの足が少し早くなる。友だちの遊ぶ声が聞こえ  
てくる。Tが小走りになる。幼稚園の垣根のところまでTと私  
の姿をみつめて、T先生とクラスメイトがかけよってくる。

そして大きい門を皆であけて迎えてくれる。Tの耳元で私が  
云う。「T君、先生におはようっていつてらっしゃい」。Tは  
スムーズに門を入り、大きなT先生の、また耳元で朝のあい  
さつをする。そして自分の部屋へ飛び込んでいった。Tにと  
って、大好きな園生活に、この朝だって泣かずに入りたかつ  
たに違いない。Tのもつ遊びや物への関わり方、願いをいっ  
ぱいもつていたに違いない。走りさる後姿を見ながら、「お  
便り」を今後どう関わらせるかと云うこと以上に、一人一人  
の園生活での配慮は、家庭への配慮でもある事を重く再確認  
した。Tのこれ以後の園での姿を次号で書いて行きたいと思  
う。

(千葉・愛隣幼稚園)